

## 〔論 文〕

# マルコ 11:3 の ὁ κύριος は誰を指しているか

木 原 桂 二

## 1. 研究の目的

本論文は、マルコ福音書 11:3 における ὁ κύριος αὐτοῦ χρεῖαν ἔχει の ὁ κύριος が指し示す対象を明らかにすることを目的としている。

通常この箇所は、イエスがロバを借りてくるよう弟子に指示した際のセリフとして「主がお入り用なのです」（聖書協会共同訳）<sup>1</sup> といったように訳されている。つまり ὁ κύριος は、エルサレムに入城するイエスに与えられた主称号であるとの認識が示されているのである。

確かに、マルコ福音書の成立年代以前のパウロ書簡において、主称号はイエス、イエス・キリスト、キリスト・イエスに対して用いられている<sup>2</sup>。おそらくパウロは、イエスを主と告白する信仰告白を伝承として受け取っていたのであり、イエスの主称号はパウロ以前の時代から用いられていたに違いない<sup>3</sup>。

そのように考えると、福音書著者マルコがイエスを主と呼び表す物語を執筆したとしても、それは当然のことのように思われる。マルコ福音書の執筆当時にイエスの主称号が流布していたのは確実だからである。とはいえ、マルコがこのキリスト教的理解を「物語」に反映させていたかどうかは別の問題と言わねばならない。物語の舞台となっているのは生前のイエスの時代だからである。マルコが時代考証をした上で執筆したとすれば、イエスの時代にはまだ主と呼ばれていなかったとして、主称号を用いることを差し控えた可能性も考えられる。

---

1 『聖書 聖書協会共同訳』日本聖書協会、2018 年。本論文中、訳書名を明記していない聖書の引用は私訳である。

2 I テサ 1:1, 3, 2:15, 19, 3:11, 13, 4:1-2, 5:9, 23, 28; I コリ 1:2-3, 1:7-10, 5:4, 6:11, 8:6, 9:1, 11:23, 12:3, 15:31, 15:57, 16:23; II コリ 1:2-3, 1:14, 4:5, 4:14, 8:9, 11:31, 13:13; ガラ 1:3, 6:14, 18; フィリ 1:2, 2:11, 19, 3:8, 20, 4:23; フィレ 1:3, 5, 25; ロマ 1:4, 7, 4:24, 5:1, 11, 21, 6:23, 7:25, 8:39, 10:9, 13:14, 14:14, 15:6, 15:30, 16:20。

3 佐竹明『ピリピン人への手紙』新教出版社、1969 年、16 頁は、フィリ 1:2 におけるパウロの祝福の言葉は「パウロ自身が常日頃（おそらく礼拝に際し）述べていた祝福の言葉を、そのまま伝えていると考えてよからう」（傍点筆者）としている（佐竹明『ガラテヤ人への手紙』新教出版社、1974 年、31-32 頁ではガラ 1:3 についても同様の見解が示されている）。また、この祝福の言葉のキリスト教的特徴として「わたしたちの父なる神」と共に「主イエス・キリスト」を挙げている。さらに浅野淳博『ガラテヤ書簡』日本キリスト教団出版局、2017 年、80 頁も、この信仰告白が原始教会の開始時において急速に拡大したことを指摘している。

ὁ κύριος は神的存在を表す場合だけでなく、人間同士の尊称として用いられることもある。たとえばマコ 11:3 の ὁ κύριος が後者の意味であるとすれば、「(ロバの)持ち主」や「(尊称としての) 主人」を指すと考えることも可能となる。キリスト教においてイエスが主と呼ばれるようになったという事実があるからといって、無前提に前者の意味で解釈すべきではない。

Robert H. Stein<sup>4</sup> は、ὁ κύριος が指し示す対象の候補は三種類あるとして、それぞれの説を唱えた研究者の名を挙げている。イエスを指し示すものとしては Gundry<sup>5</sup>; Hooker<sup>6</sup>; J. Edwards<sup>7</sup>、神を指すものとしては Evans<sup>8</sup>; France<sup>9</sup>、そしてロバの持ち主としては V. Taylor<sup>10</sup>; W. Lane<sup>11</sup> の名が示されている。しかし、それに加えて尊称としての「主人」という訳の可能性もある。たとえば、Ezra P. Gould<sup>12</sup>、田川建三<sup>13</sup>、佐藤研<sup>14</sup> がこの解釈を採用している。本論文では、この解釈の可能性も含めて検証する。

方法論としては、マルコ福音書全体における主称号の用いられる方を踏まえつつ、当該箇所の前後の文脈に特に注意を払いながら、ὁ κύριος が指し示す対象を明らかにしたい。

## 2. マルコにイエスの主称号は用いられているか

### 2.1. マルコにおける κύριος の用例概観

マルコにおいて κύριος は、指し示す対象を問わないで数えると全部で 16 回用いられている。そのうちの 2 回は、譬え話の中に登場する「主人」を指しているので明らかに主称号とは関係がない (12:9, 13:35)。もっとも 13:35 の ὁ κύριος は間接的に再臨

---

4 Cf. Robert H Stein, *Mark*, BECNT (Grand Rapids: Baker Academic, 2008), 570f.

5 R. H. Gundry, *Mark: A Commentary on His Apology for the Cross* (Grand Rapids: Eerdmans, 1993), 624, 628.

6 M. D. Hooker, *The Gospel according to Saint Mark*, Black's New Testament Commentary (London: Black, 1991), 258.

7 J. R. Edwards, *The Gospel according to Mark*, Pillar New Testament Commentary (Grand Rapids: Eerdmans, 2002), 335.

8 C. A. Evans, *Mark 8:27-16:20*, WBC (Nashville: Nelson, 2001), 143.

9 R. T. France, *The Gospel of Mark*, NIGTC (Grand Rapids: Eerdmans, 2002), 432.

10 V. Taylor, *The Gospel according to St. Mark: the Greek Text with Introduction, Notes, and Indexes* (London: MacMillan, 1952), 454f.

11 W. L. Lane, *The Gospel according of Mark: The English Text Introduction, Exposition and Notes*, NICNT (Grand Rapids: Eerdmans, 1974), 391f. n3.

12 Ezra P. Gould, *A Critical and Exegetical Commentary on the Gospel according to St. Mark*, ICC (New York: C. Scribner's Sons, 1896), 207 は *The Master* の訳語を提案しているが、その説明を見る限り「先生」を意味しているように理解できる。しかしここでは「主人」という訳語の範疇に入れておく。

13 田川建三訳著『新約聖書 訳と註 1 マルコ福音書／マタイ福音書』作品社、2008 年、34 頁。

14 『新約聖書 改訂新版』(新約聖書翻訳委員会訳) 岩波書店、2023 年、48 頁。しかし佐藤は注において「あるいは『主』」(49 頁)とも述べており、「主人」という訳語を選択した論拠を示していない。

のイエスを指し示していると考えられるが、それでも ὁ κύριος は譬え話の登場人物である主人を指しているの、イエスに対して与えられた主称号ではない。

5:19, 11:9, 12:11, 12:29<sup>X2</sup>, 12:30, 12:36 (一回目), 13:20 の κύριος については、神を指し示すために用いられている。キリストを指し示す κύριος の事例が 1:3, 2:28 (この箇所のみ「人の子」), 12:36 (二回目), 12:37 に見られるが、いずれも暗示的であり、パウロ書簡のように直接的にイエスを主と呼び表しているわけではない。さらに、われわれの課題である 11:3 とは別に、物語の登場人物がイエスに対して κύριε と呼びかけている箇所がある (7:28)。この箇所の κύριε は、ほとんどの翻訳において「主よ」と訳されており、イエスが神的存在と見なされていることを示唆している。

ただし NRSV と REB は “Sir” という訳語を用いているので、物語中の女性はイエスに対して一般的な敬称を用いたと理解されている。他にもこの種の翻訳があるかもしれないが、敬称という理解を示す翻訳の一例として、ここに取り上げた。

比較的最近の日本語訳聖書である田川建三訳は「実はマルコ福音書で誰かがイエスに『主よ』と呼びかけるのは、この箇所だけである (ほかに 10:51 の西方系写本の読み)」<sup>15</sup> と述べて、従来の主称号の解釈を踏襲している。田川は、マルコがイエス時代の雰囲気伝える著者であると考えている<sup>16</sup> ので、その観点からすれば主称号の解釈を避けられそうに思われる。しかし田川は、おそらくマルコは伝承をそのまま記したのだろう<sup>17</sup> と理由を述べて、マコ 7:28 では主称号が用いられたと推測する。「主よ」ではなく「ご主人様／先生」といった別訳の可能性については、特に示されていない。

いずれにせよ NRSV と REB は別として、「主よ」の訳が適切であるとすれば、7:28 はマルコ福音書の中でイエスに主称号が用いられる最初の箇所ということになる。その上で、先に列挙した箇所以外で κύριος が現れるのは、われわれが課題とする 11:3 のみとなるため、7:28 と 11:3 の二箇所がイエスに主称号を明示的な形で使用した箇所と見なせる可能性が残される。

果たしてそうであるのか。次項においては、7:28 の κύριε がイエスの主称号と見なされるべきなのかどうかを、11:3 の考察に先立って検証することにしたい。

## 2.2. マルコ 7:28 の κύριος

マルコ 7:28 でイエスに κύριε と呼びかけているのは、シリア・フェニキア生まれ

15 田川『マルコ／マタイ』、271頁。ちなみに、田川が指摘している 10:51 の西方系写本は D it のことであり、証言の価値が低いのでオリジナル原文であるとは判断できない。

16 田川『マルコ／マタイ』、271頁参照。

17 田川『マルコ／マタイ』、271頁参照。

のギリシア人女性である。それゆえ、この κύριε を「主よ」と訳すならば、異邦人である彼女がユダヤ教信仰を理解した上で、ユダヤの神が遣わした救い主としてイエスを認識していたと捉えられるだろう。25 節によれば、彼女はイエスの活動に関する噂を耳にしていたので、この可能性はありうるかもしれない。ただし、すでに指摘したように、これから検証する 11:3 を除いて、イエスを主と明確に言い表しているテキストはマルコ福音書には存在しないということを考慮しておく必要がある。

ちなみに、この箇所と並行記事であるマタイ 15:21-28 (ルカに並行記事はない) において、登場人物のギリシア人女性はカナン人に変更されている<sup>18</sup>。異邦人女性の物語であることに変わりないが、呼びかけの言葉が大きく修正されている。マルコでは κύριε とされている言葉が、マタイ 15:22 では「主よ、ダビデの子よ (κύριε υἱὸς Δαβὶδ)」となっているため、マタイ版ではイエスがイスラエルのメシアとして認識されていることが明白である<sup>19</sup>。おそらく、マタイは曖昧に感じられたマルコ福音書の表現を明示的なものに修正したのであろう。もしかしたらマタイにとっても κύριε だけでは、それが「主よ」という神的存在への呼びかけなのか、それとも「ご主人様」という意味の尊称であるのか明確ではなかったのかもしれない。いずれにせよ、「ダビデの子」という称号の付加が、イエスを神的存在として示すことに貢献しているのは確かである<sup>20</sup>。

実際マタイでは、イエスを「主」と言い表すことが自明になっている。マタ 7:21f. (=Q) において、すでにイエス自身の言葉としてイエスが主と呼ばれるべき存在であることが明示されており、同じことはルカ 6:46 (=Q) にも言える<sup>21</sup>。それゆえ、新約聖書

18 U. ルツ 『EKK 新約聖書註解 I/2 マタイによる福音書 (8-17 章)』(小河陽訳) 教文館、1997 年、557-558 頁 (U. Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, EKK I/2 [Neukirchen-Vluyn: Neukirchener, 1990]) 参照。もちろん、マタイが別伝承を知っていた可能性もある。田川『マルコ/マタイ』、717 頁参照。

19 ルツは、「『ダビデの子よ』という呼びかけをもって、彼女は異邦人女が、困難に悩む自分の民イスラエルの中ですでに多数の人間を癒したイスラエルのメシアに向かうということ表現している」と述べている (ルツ『マタイ (8-17)』、559 頁)。

20 R. T. France, *The Gospel of Matthew*, NICNT (Grand Rapids: Eerdmans, 2007), 593 も、基本的に κύριε という呼びかけは一般的な意味での尊称であるとしつつも、マタイの当該箇所に関してはダビデの子との結びつきにより、深い意味を帯びていると述べている。また、登場人物の女性は明らかにユダヤ教の知識を有しており、ユダヤ教のメシアの称号を用いることでイエスの関心を呼び起こそうとしているとも主張している。

21 マタイとルカが「主」と呼ばれることを前提するイエスを描いたからといって、その「主」が尊称以上の意味を帯びていることを、この箇所のみによって判断するつもりはない。マタイ 25:31-46 において、イエスは終末時の審判者としての主である (cf. France, *Matthew*, 293f.)。またルカ 5:8 では、ペトロがイエスを神的存在である主と見なしている (木原桂二『ルカの救済思想 断絶から和解へ』日本キリスト教団出版局、2012 年、20-22 頁参照)。このことは、登場人物が神的存在に出会った時の様子を描く典型的なパターンとしての“Epiphany Story”という様式から確認できる (cf. M. D. Goulder, *Luke: A New Paradigm*, Vol. I [Sheffield: Sheffield Academic Press, 1989], 320; J. B. Green, *The Gospel of Luke*, NICNT [Grand Rapids: Eerdmans, 1997], 233; K. Mineshige, *Besitzverzicht und Almosen bei Lukas* [Tübingen: Mohr Siebeck, 2003], 44f.)。つまり、マタイとルカにおいては、その生前からイエスは「主」として認められていたという理解が前提されているのである。果たしてマルコにも、同じことが言えるのだろうか。

の中でマルコ以前の文書であるパウロ書簡、成立年代不詳のQ（少なくともマタイ／ルカよりは古い）、そしてマタイ／ルカがイエスを主と呼び表していることに比較すると、マルコの場合はそのような事例はほとんど見られない。7:28と11:3の κύριος が「主」を指す可能性はあるが、両箇所とも κύριος が神学的意味のない尊称である可能性も考えられる。そうであるとすれば、マルコ福音書のイエス理解は当時のキリスト教文献の中では異例ということになる。

ところで、すでに指摘したように7:28の κύριε はNRSVとREBにおいて尊称の“Sir”と訳されている以外は、日本語訳で「主よ」、英語訳では“Lord”と訳される場合が多く、神的存在としての「主」と解釈される傾向が強い<sup>22</sup>。尊称であるとする理解は少数派であるが、マルコがこのような形で主称号を無前提に用いるとは考えにくいのである。マルコはQやマタイ／ルカと異なり、イエスに主称号を使用していることが異論なく判断できる箇所が存在しないからである。

しかしこの点については、マルコ12:36f.に言及しておく必要がある。この文言を含むペリコーペでは、キリストをダビデの子と見なす根拠を問う議論の中で(12:35)イエスがこの考えを否定し、ダビデ自身が「主はわたしの主に言った(εἶπεν κύριος τῷ κυρίῳ μου)」(12:36)と発言したとされている。つまり、前者の「主」は神を指しており、後者の「主」はキリストを指しているのだから、キリストをダビデの子と称するのは誤りであるという論理である(同27節参照)。あるいは、キリストはダビデ以上の存在であるとする考えの表明なのかもしれない。

マルコの物語のイエスは詩110:1を論拠に用いているが、これは元来のヘブライ語テキストの解釈とは異なっている<sup>23</sup>。おそらくマルコはLXX109:1(=MT110:1)を引用しているのであろう<sup>24</sup>。しかし、こうした解釈の妥当性の問題は脇に置くとして、キリストは主であるとの認識をマルコが示しているのは間違いない。そしてマタイ22:41-46とルカ20:41-44も、この箇所のマルコの描き方を採用しているのも同じ認識が示されていると言える。

ただしマルコの場合は、福音書の語り手であるマルコ自身が冒頭でイエスをキリストと公言している(1:1)ものの、マルコの物語においてはイエスを何者であると言い表すべきかについて、極めて微妙な取り扱いになっているのである<sup>25</sup>。確かにマル

22 Robert A. Guelich, *Mark 1-8:26*, WBC (Dallas, Texas: Word Books, 1989), 388 はマコ7:28について、マタイでは絶えず信仰者の口にのぼる主称号が、マルコでは一度だけ告白的な含みをもって現れていると述べている。しかし、なぜこの箇所の一度きりであるのか理由が述べられていない。

23 Cf. Stein, *Mark*, 570f.

24 田川『マルコ／マタイ』、391頁参照。

25 マルコ福音書の終盤に、大祭司がイエスに向かってメシアであるかどうかを尋問する場面がある(14:61)。これに対してイエスは ἐγώ εἰμι (62節)と答えているが、一般的には「私がそれである」(聖

コ 12:35-37 のイエスは、キリストや主、そしてダビデの子の話題を口にしているが、イエスが自分をキリストや主であると明言しているわけではない。むしろ、イエスが他人事のように語っている点に注意を払う必要がある<sup>26</sup>。

マルコの特徴を確認するためにペトロの信仰告白の物語（マコ 8:27-9:1）を取り上げよう。このテキストはニュアンスを変えてマタ 16:13-28（// ルカ 9:18-27）に採用されているが、マタイ版のイエスはペトロによって「主」と呼ばれている（マタ 16:22）<sup>27</sup>。後続の物語でも同様に、ペトロはイエスを「主」と呼んでいる（マタ 17:4）。マタ 17:4 の並行記事であるマコ 9:5 においてイエスは「先生（ῥαββί）」と呼ばれているので、マタイは意図してペトロに「主（κύριε）」と呼ばせていることがわかる<sup>28</sup>。

このように見ていくと、一度しか登場しないギリシア人の女性がイエスに「（神的存在としての）主」と呼びかけたと理解するのは、マルコ全体の物語展開からすると考えにくいと言わざるを得ない。むしろ、そのように捉えるのは不自然であるとさえ言える。しかし、そうでありながら多くの翻訳においてマコ 7:28 の呼びかけが「主よ」と訳されているのは、翻訳者が無意識のうちにマタイやルカの描き方、さらにはパウロ書簡に見られる「主イエス」といった表現を前提しているからではないだろうか<sup>29</sup>。

---

書協会共同訳）のように訳されるので、マルコの描くイエスが自分のメシア性を明らかにしたように理解されがちである。しかし J. D. クロッサン／M. J. ボーグ『イエス最後の一週間 マルコ福音書による受難物語』（浅野淳博訳）教文館、2008 年、52 頁（Marcus J. Borg & John Dominic Crossan, *The Last Week: The Day-by-Day Account of Jesus's Final Week in Jerusalem* [New York: HarperCollins, 2006]）は、ἐγώ εἰμι が曖昧な表現であること、マタイとルカが並行記事において肯定表現を避けていること（マタ 26:64 // ルカ 22:70）、さらにギリシア語文法では疑問形に理解する余地があることから「私がそうですか」と理解するのが適切であると提案している。その上で「マルコは、イエスの口を通して彼の性質を明示しません。したがって、イエスの本質を明示することがこの福音書の中心的主題ではないようです」（52-53 頁）と述べている。

26 たとえば Hallur Mortensen, *The Baptismal Episode as Trinitarian Narrative* (Tübingen, Germany: Mohr Siebeck, 2020), 226 は、マルコ 1:1 においてイエスがキリスト (Mortensen は "Messiah" としている) と明言されていることを前提として、物語中のイエスもそれを明らかにしている (14:61-62) とし、さらにイエスはダビデの子の称号も受け入れた (10:48-49) と、これらの箇所を解釈している。12:35-37 についても、この解釈の延長線上で、当該箇所の主要な点はイエスがメシアとしてのダビデの子以上の存在であるとの理解を示している。しかしすでに述べたように、マタイやルカと異なり、マルコのイエスは自分の身分や称号を明確に示そうとしない傾向がある。

27 John Nolland, *The Gospel of Matthew*, NIGTC (Grand Rapids: Eerdmans, 2005), 688 は、マタイのペトロは五回にわたってイエスを「主」と呼んでいると指摘している。マタ 14:28, 30, 16:22, 17:4, 18:21 参照。

28 Nolland, *Matthew*, 702 は、マタイにおける「先生（ラビ）」という呼称には否定的なニュアンスがあると指摘している (23:7, 8, 26:25, 49)。つまり逆から言えば、マルコにおいては、イエスがラビと呼ばれることには何の違和感もなかったのだろう。もちろん、マルコ自身がイエスをラビと認識していたという意味ではない。マルコは時代考証により、生前のイエスはラビと呼ばれていたという事実を示しているにすぎない。その点でマタイは時代考証をするのではなく、信仰告白的な物語を整えたと考えられる。それはルカも同じである。ところで、マルコ 7:28 におけるイエスへの呼称が ῥαββί ではなく κύριε とされているのは、異邦人女性に「ラビ」と呼ばせるのは違和感があるので「ご主人様」という呼びかけにしたということかもしれない。

29 岩波版『新約聖書 改訂新版』、32 頁も当該箇所を「主よ」と訳している。

### 3. マルコ 11:3 の ὁ κύριος は誰を指しているか

以上の考察を踏まえた上で、マルコ 11:3 の ὁ κύριος が神的存在（「主イエス」または「神」）を指しているのか、あるいは「(ロバの) 持ち主」または「(尊称としての) ご主人様」を指しているかを検討していきたい。

#### 3.1. 「主イエス」または「神」を指すと解釈する可能性

まず物語の背景を確認しておこう。イエスと弟子たちがエルサレムに近づいたとき、イエスはエルサレム入城に用いるロバを調達しようとした (11:1-2, 7-11)。その手段としてイエスが弟子に指示した内容が 2 節に記されている。「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだ誰も乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて、連れて来なさい」(聖書協会共同訳)。

さらに、次の 3 節においてイエスは、ロバを連れ出す行為が咎められる可能性があることを示唆する。このロバは、イエスが所有するものではないからである。だからこそ「なぜ、そんなことをするのか」(同訳) と問われるかもしれないというのである。そこでイエスは、この問いに対して「『主がお入り用なのです。すぐここにお返しになります』と言いなさい」(同訳) という指示を与えたのであった。

さて、ここに引用したのは聖書協会共同訳であるが、新共同訳や口語訳、さらには英語圏の翻訳でも神的存在を表す「主 / *The Lord*」の訳語が用いられる場合が極めて多い。つまり、神的存在であるイエスがエルサレムで神の意志を示すために、神の威光を用いてロバを調達しようとしたとする理解が示されていると考えられる<sup>30</sup>。しかしすでに論じたように、パウロ書簡や他の共観福音書では自明とされているイエスの主称号は、マルコにおいては決して自明ではない。それならば、なぜここでイエスは自分自身が「主」であることを弟子たちに表明したと考えられるのだろうか。

われわれは、マコ 11:3 の ὁ κύριος を「主」と解釈することについて懐疑的になら

30 川島貞雄『十字架への道イエス マルコによる福音書』講談社、1984年、147-148頁は「しかしここでイエスは、たんなる預言者ではなく、権威ある主として描かれている」と述べている。また、L. ウィリアムソン『マルコによる福音書』(山口雅弘訳) 日本基督教団出版局、1987年、325頁 (Lamar Williamson, Jr., *Mark, Interpretation: A Bible Commentary for Teaching and Preaching* [Louisville: John Knox Press, 1983]) は、「イエスは、子ろばが神聖な目的のために必要とされていると言うように、弟子たちに命じるのである」と述べ、さらに福音書記者による読者への伝達のレベルでは「主はイエスである」と判断している。この解釈も、主による神的権威が行使されたと理解する立場である。しかし一方で、Gould, *St. Mark*, 207 は ὁ κύριος を *the Master* と訳した上で、ὁ κύριος はイエスと弟子たちの関係性を示すために用いられているのであり、イエスのメシア的な地位が想定されているわけではないとしている。われわれは、相反するこれらの解釈について、一つの結論を見出す考察を行いたい。

ざるをえない。この場面でイエスが「主」であることを自称したとすれば、イエスの神学的素性を曖昧に描き続けるマルコの筆致とは異なり唐突な印象を受けることになるからである。もちろん、マルコは福音書の冒頭において「[神の子]<sup>31</sup> イエス・キリスト」と述べているのであるから、マルコがイエスを神的存在であるキリストと見なしているのは確かである。しかしマルコが生前のイエスの自己認識と、マルコの時代の教会によるイエス理解を区別していることに注意を払う必要がある。

すでに確認したように、他の福音書においてはイエスに関する神学的理解が物語の中に反映されてしまっている。一方マルコでは、著者マルコの時代に存在したイエス理解は物語の中に反映されていない。しかしそれでも、マルコはイエスがエルサレム入城に必要なロバを調達する際に、自分が「主」であることを、まさにこのとき弟子たちに示したと解釈することも決して不可能ではないであろう<sup>32</sup>。もちろん、そのように解釈するのであれば、その根拠を示す必要がある。

仮にイエスが主の権威をもってロバを借用しようとしたのであれば、なぜ借りようとしたのかが問われねばならない。神的な目的のためにロバを連れていくだけであるならば「主がそれを必要としているのです (ὁ κύριος αὐτοῦ χρεῖαν ἔχει)」(マコ 11:3) の一言で十分であろう。しかしマルコのイエスは弟子たちに、この言葉に続けて「それ (ロバ) を、すぐにここに戻しますので (καὶ εὐθὺς αὐτὸν ἀποστέλλει πάλιν ὧδε)」と言うように指示している。主の必要のためにロバを利用するのであれば、なぜ、すぐに (εὐθὺς) 返すことを約束しなければならないのだろうか。ὁ κύριος を「主」と解釈すると、このような違和感を抱かざるをえなくなる。ὁ κύριος をイエスではなく「神」を指すと理解したとしても全く同様の問題が生じるので、いずれにしても神的存在を指すという解釈は困難であると言わねばならない。

このことは、ルカとマタイの並行記事の編集の仕方を見ると確認することができる。ルカは καὶ εὐθὺς αὐτὸν ἀποστέλλει πάλιν ὧδε という文言を丸ごと削除してしまった (ルカ 19:31//マコ 11:3)。その理由は、ルカ福音書においてこの発言は不要なものと考えられるからであろう<sup>33</sup>。むしろ、あってはならないものである。ルカの物語に登場する人物たちは、イエスが主であることを自明のこととして認識しているからで

31 ἄ\* に「神の子」は欠けているので、元来のテキストにはなかった可能性がある。ただし、本文であるとする見解もあるので、一応カッコに入れておいた。

32 Stein, *Mark*, 504 は、マルコがイエスに主称号を用いている箇所として 1:3, 2:28, 5:19 を示した上で、11:3 の ὁ κύριος はイエスを指していると結論づけている。しかし 1:3, 2:28 の「主」がイエスを指しているとしても、それはあくまでも暗示的であり直接的ではない。また、5:19 の「主」は神を指していると思われる (cf. Guelich, *Mark* 1-8:26, 285)。仮に 11:3 の「主」がイエスを指しているとしても、イエスが自分の地位を明確に表しているという意味で、マルコにおいては極めて異例な表現になるということに注意を払わねばならない。

33 Cf. I. Howard Marshall, *The Gospel of Luke*, NIGTC (Grand Rapids: Eerdmans, 1978), 713.

ある（ルカ 5:8, 13:23, 17:37 他）。主であるイエスがロバを返却しに戻ってくる様子を想像することはできない。

おそらくマタイも、同じ違和感を抱いたのだろう。マタイはルカと異なる仕方での問題を処理しているが、マコ 11:3b の καὶ εὐθὺς αὐτὸν ἀποστέλλει πάλιν <sup>34</sup> ὧδε に修正を施して、異なる意味の発言にしている。イエスが「そうすれば彼（ロバの連れ去りを見て声をかけた人物）は、すぐにそれら（マタイでは二頭のロバ）を渡してくれるだろう（εὐθὺς δὲ ἀποστελεῖ αὐτούς）」（マタ 21:3）と語ったことにされている <sup>35</sup>。下線部の語に共通性はあるものの文意が変えられていることがわかる。

このように、マタイではロバの無断借用を疑われて言い訳じみた発言をするマルコの描き方とは著しく異なっている。そもそもマタイでは、ロバの連れ去りを咎められる事態は想定されておらず「誰かがあなたがたに何かを言ったなら（*εἰάν τις ὑμῖν εἶπη τι*）」（21:3）と弟子に語りかけられている。マタイによって、マルコのテキストにあった返却の約束の言葉は、そうっておけば（主が必要だと言っておけば）ロバを渡してもらえらるだろうという、この計画の成功を確実なものとする言葉に変更されたのである。つまりルカとマタイでは編集の仕方が異なるものの、神的存在である主の権威が引き起こす物語に変えられているのである。

### 3.2. 「(ロバの) 持ち主」または「(尊称としての) 主人」を指すと解釈する可能性

以上のように、マルコ 11:3 の *ὁ κύριος* を神的存在であると解釈するのは、マルコ全体の描き方及び当該箇所文脈における物語展開から考えると困難であることがわかる。そうすると、残された可能性としては「(ロバの) 持ち主」または「(尊称としての) 主人」という訳語が考えられる。その解釈の可能性を検討しよう。

前者の「(ロバの) 持ち主」については、すでに V. Taylor が提唱した説として、よく知られている <sup>36</sup>。Taylor は、その根拠として、前述の *καὶ εὐθὺς αὐτὸν ἀποστέλλει πάλιν ὧδε* という文言に着目した。つまり、持ち主が必要としているロバをすぐに返

34 *αὐτὸν ἀποστέλλει πάλιν* は  $\aleph D L$  等の読みだが、他のいくつかの重要な写本に語順の異なるものがある。中でも A C<sup>2</sup> K Γ 等は *πάλιν* を欠いているが、後述のマタ 21:3 のように読ませようと考えた写字生の仕業であろう。

35 U. ルツ『EKK 新約聖書註解 I/3 マタイによる福音書 (18-25 章)』(小河陽訳) 教文館、2004 年、774 頁、注 32 (U. Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, EKK I/3 [Neukirchen-Vluyn: Neukirchener, 1997]) は、「彼(筆者注: マタイ)はおそらく、雄ろばの所有者を主語と考えたのだろう」と述べている。つまりルツの見解は、われわれの判断とは異なり、マタイが意図的に文意を変えたとはまでは考えていないようである。W. C. Allen, *A Critical and Exegetical Commentary on the Gospel according to S. Matthew*, ICC, 3rd ed. (Edinburgh: T. & T. Clark, 1912), 220 も同様の見解。しかしマタイは *πάλιν* を削除しているのだから、主語を誤認したとは考えにくい。むしろ意図的な改変と見なされる。

36 Cf. V. Taylor, *The Gospel according to St. Mark: the Greek Text with Introduction, Notes, and Indexes*, 2nd ed. (London: MacMillan, 1966), 454f.

却すると言えば、期待通りの返答をもらえるというのである。確かに、ロバの返却の約束という事柄が神的行為と馴染まないのは事実であり、その点ではこの見解にも一理あるように思える。

しかし、この Taylor の主張にも違和感を抱かされる。ロバの持ち主が連れて行こうとしていたのであれば、ロバの返却を約束する必要はないからである。持ち主がすることであれば、それこそ持ち主の勝手であり、そこに戻さねばならない必然性はない<sup>37</sup>。「(ロバの) 持ち主が必要としているのです」とだけ言えば済む話であろう。つまり、この Taylor の主張には、われわれが「主」とする解釈に異議を唱えたのと同じ問題が存在していることになる。

そこで、次に考えられるのは「主人」という訳語である。この場合の主人は、ロバの持ち主ではなく、弟子たちにとっての神的存在でもない。彼らの生活圏の中に存在する、彼らにとっての目上の者を指している。弟子たちと主人は社会的な主従関係にあるので、彼らは主人に言われたことを実行しなければならない<sup>38</sup>。また、この主人はロバの持ち主ではないので、借りたものは返す必要がある。だから弟子たちは、すぐに返すことを約束するように指示されたのである。そのように考えれば、マタイ／ルカと異なるマルコ福音書特有のセリフの意図を理解できるだろう<sup>39</sup>。

それにしても実際の問題として、弟子が自分たちの主人の存在を示したからといって、ロバを連れ去ることが許されるだろうか。この点に関して、Nestle-Aland の 28 版が当該箇所に関連箇所としてマコ 14:13-16 を指示していることに注目したい<sup>40</sup>。14:13-16 は、過越の食事をする部屋がすでに手配されているということを示しており、エルサレムでの最後の時に向けたイエスの周到な準備の様子がうかがえる。つまり、このエピソードと同様に、ロバを借りる際にも何らかの形で事前の準備がなされていたと想定することができる。

これについては Lane も当該箇所との関連を指摘しているが、このときロバの持ち主がイエスと一緒にいたとして、ὁ κύριος はロバの持ち主 (*the owner*) であると主張

---

37 Stein, *Mark*, 504 も、これと同じ理由を挙げて Taylor の説に皮肉を込めた反論をしている。しかし Setin はわれわれと異なり、ὁ κύριος を「主イエス (*Jesus is Lord*)」と解釈している。確かに、ロバの持ち主が自分のロバをすぐに返すと約束するのはおかしいが、神的存在である主がそのように約束することにも違和感があるので支持できない。われわれが、すでに論じた通りである。

38 ὁ κύριος を「先生 (*the Master*)」と訳すことも可能。

39 佐藤研 (岩波版『新約聖書 改訂新版』、32 頁) が、マコ 11:3 ὁ κύριος を「主人」と訳した点は評価できる。しかし、並行記事のマタ 21:3 とルカ 19:31 の ὁ κύριος を「主人」と訳したことには同意できない (149 頁、282 頁)。すでに述べたように、マタイとルカの物語において、イエスは神的存在である主と見なされているからである。田川『マルコ／マタイ』、100 頁；田川建三訳著『新約聖書 訳と註 2 上ルカ福音書』作品社、2011 年、69 頁にも同様の問題が見られるが、並行記事であっても福音書著者独自の思想に基づいて訳し分ける必要がある。

40 K. Aland et al. (Hg.), *Novum Testamentum Graece*, 28 Aufl. (Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2012), 148.

している<sup>41</sup>。しかし、マコ 14:14 の「先生 (ὁ διδάσκαλος) が、『弟子たちと一緒に逾越の食事をする宿屋はどこか』と言っています」<sup>42</sup> という文言との関連性を考慮するのであれば、ὁ κύριος を主人 (*the Master*) と解釈するほうが適切であると考えられる。ロバの持ち主には返却の必要がないということは、すでに指摘した通りである。

以上の考察の結果、われわれはマコ 11:3 の ὁ κύριος を「主人／先生」と解釈することが妥当であると結論づけることにしたい。

#### 4. 結論

マルコ福音書以前のパウロ書簡及び、マルコ以降に成立した他の福音書においては、イエスを「主」と見なす理解が自明となっている。パウロの時代には、原始キリスト教会における信仰告白が共有されていたので、彼の書簡の中ではイエスが主と呼ばれていたことが多数明記されている。しかし福音書の場合は執筆年代が 70 年以降なので、生前のイエスがすでに「主」と呼ばれていたように描くのは時代錯誤の感がある。しかしマタイとルカでは、当然のごとくにイエスが「主」と呼ばれている。

その点、マルコは福音書の冒頭でイエスがキリストであることを明示するが、物語の登場人物がイエスに向かって主称号を用いることはない。例外的な箇所として、7:28 において異邦人の女性がイエスに κύριε と呼びかけるが、ここは神的存在として認めた上での「主よ」ではなく、尊敬の念を込めた「ご主人様」といった呼びかけであると解釈するのが適切である。つまりマルコは、イエスの生前には教会の時代に生じた信仰理解がなかったことを前提として物語を進展させているのである。

その前提を踏まえると、マコ 11:3 の ὁ κύριος も「主」と訳すべきかどうかの問題となる。マタイ／ルカの並行記事は、いずれもイエスが「主」であることを前提にしている。しかしマルコのイエスは、借りたロバをすぐに返却することを約束するように指示しているため、神的権威をもってロバを入手する物語には読めない。「ロバの持ち主」と解釈する場合も同様に、持ち主なら返却する必要はないので適切な解釈とは言えない。それゆえ、ὁ κύριος は「主人」または「先生」の意味であると判断するのが相応しいと考えられる。この理解であれば、すぐにロバを返すという約束とのつながりも違和感がない。

さらに言うと、この解釈はマルコ全体の傾向とも合致する。マルコの物語において、イエスが何者であるかについては、常に曖昧なままにされているからである。しかし

41 Cf. Lane, *Mark*, 391f. n.3.

42 ギリシア語の引用以外の本文は『聖書協会共同訳』より引用。ただし、カッコの用い方を変えている。

マルコ 11:3 の ὁ κύριος は誰を指しているか

7:28 や 11:3 の箇所について、イエスが「主」と認められていたように解釈する翻訳や研究者が多い。パウロ書簡のイエス理解や、マタイとルカの並行記事の影響が及んでいるのだろう。しかしマルコにはマルコの描き方の特徴があるので、それを踏まえて解釈する必要があるし、翻訳にもそれを生かすべきことを主張したい。

【Abstract】

Who is referred to by ὁ κύριος in Mark 11:3 ?

KIHARA Keiji

The purpose of this paper is to examine who is the object referred to by ὁ κύριος in Mark 11:3.

This question has been debated: some interpretations of ὁ κύριος as a divine being include "the Lord Jesus" and "God." On the other hand, there are those who do not consider ὁ κύριος to be a divine being, but rather "the owner of the donkey" or "the master of the disciples." In the following ways, this paper tries to solve the problem.

First, we looked at how κύριος was used as a tendency in Mark. The results show that there is no direct phrase in Mark that describes Jesus as Lord. However, Mark 7:28 is the only exception, so we examined whether the Gentile woman's address to Jesus was "Lord" or "Sir." Matthew 15:22, the parallel article to Mark 7:28, is edited to recognize Jesus as the Son of David. Therefore, Mark cannot be read the same way as Matthew.

Second, in order to clarify the object to which ὁ κύριος refers, we have examined Mark 11:3. Matthew 21:3 and Luke 19:31, which are parallel articles to Mark 11:3, are edited to make it clear that Jesus is divine being. In Mark, however, Jesus instructs the donkey he has borrowed to promise to return it immediately. Thus, Mark's story cannot be read as a story of the exercise of divine authority to obtain a donkey. In the same way, it is not appropriate to interpret ὁ κύριος as meaning "the owner of the donkey," since he is not required to return the donkey.

We can conclude that ὁ κύριος is "the Master of the disciples." According to this interpretation, there is nothing strange about the disciples' promise to return the donkey. It would also be consistent with Mark's general tendency to keep the divine status of Jesus ambiguous.